

濾過する時間 菅原百合絵

新人賞を受賞し、話題となつてから長い歳月を経て、今年二冊の歌集が刊行された。小原奈実『声影記』、そして馬場めぐみ『無数を振り切つていけ』である。流れた歳月という観点から見ると、この二冊は興味深いコントラストを示している。

小原は二〇一〇年に角川短歌賞の次席となり（ちなみにその年の角川短歌賞を獲つたのは大森静佳である）、弱冠十九歳とは思われない完成度の高い連作で大いに注目された。

・カーテンに鳥の影はやし速かりしのちつくづくと白きカーテン
・糸んどうの花の奥処をまさぐりてメンデルは夜に手をすすぎしか

「糸んどうの花の奥処」やカーテンに過る鳥の影といった細部に目を注ぎ、硬度の高い理知的な表現でそれらを描写する小原の持ち味は、歌集の後半になつても保たれ、さらに深化して研ぎ澄まされている（編年体とは明記されていないことには注意が必要だが）。

・揚雲雀喉ひらくとき体内にひとすぢ初夏の陽は至りあむ
・時をやや先に行かせて道の辺に鳥の散らせる花を浴びあつ雲雀の喉に差す光や、鳥の散らす花びら。普段は眼にとまらなようなモチーフを十全に活かす歌の構成、陽が「射す」ではな

く「至る」、「時を先に行かせる」などの言葉選びにのぞく鋭い時間意識は、前述の初期作品の美質の延長線上にある。

小原が角川短歌賞の次席となつた翌年、二〇一一年に短歌研究新人賞を受賞した馬場めぐみは「命がけて生き延びる」とでも形容できそうな、必死で切実な歌で話題になった。

・菌ブラシで排水口をひたすらにこする時の目でなにかもを見る

・点滅をしているみたいな次の日を手でも足でも菌でも掴む
菌ブラシの歌の下句の八音・八音の無骨さや「菌でも掴む」の「で」音の連続など、馬場の歌は小原作品に比べるとやや荒削りなところがあるが、この粗さこそが生きづらい作中主体のひたむきさを浮き彫りにし、魅力をつくりだしている。

しかし歌集には、作者の揺らぎも率直に詠みこまれてゆく。

・かたくなであれずにごめん十代を感傷に踏み台にして 行く
・思春期に正しい終わらせ方はないけれども壊れたくならない

歌集後半には「もう」という言葉が何度も登場する。思春期の終わり、妊娠や出産といった自己変容を戸惑いつつも受け入れてゆくプロセスが歌の変化とリンクする様子は胸を打つ。

深化と変化、という言葉で二冊の歌集の傾向をまとめることは乱暴にすぎよう。だがいづれにせよ、両者の作品がそれぞれの仕方での流れに濾過され、じっくり選り抜かれて歌集に結実したことには変わりない。そのこと自体を言祝ぎたい。